

手術前患者の不安と要求を男女別に考える

南5階病棟：甲斐沢政美

1. はじめに

手術を受ける患者は術前に手術の必要性を理解し不安をてせきる限り軽減して手術に望むことが望ましい。また看護婦は術前オリエンテーションや術前訓練を指導する際、患者の不安緩和のための言葉がけや援助をする義務がある。

手術前患者がどのようなことを不安に思っているか、またどのような援助を必要としているか男女差をふまえて知っておくことはより良い術前援助をするために大切なことである。

そこで本稿では術前患者の不安と要求を男女別に考察したので結果を述べる。

2. 方法・実施

- (1) 平成3年4月から平成5年3月までに当科で手術をうけた20才以上の男女を対象とした。
- (2) 対象者は退院間近、もしくは退院後1年以内で当科外来で follow up 中の患者とした。
- (3) 対象者と対話しアンケート調査に協力を得た。

3. 結果

調査期間中250名(男性160名女性90名)にアンケート調査を施行した。対象者のうち男性53%女性33%が職業を有していた。

(1) 不安の内容について (図1・2・3)

手術前の不安の内容で男女共30%以上を占めるのが、①「術後の疼痛」(男性68%女性39%)
②「手術は無事終了するか」(男性56%女性39%) ③「麻酔は良く効くか」(男性36%女性34%)
である。

④「いつ頃から歩けるか」⑤「職場復帰はいつ頃か」⑥「どんな手術をするか」の3項目は男性が20%以上不安であると答えたのに対し、女性は10%前後である。⑦「麻酔からちゃんと醒めるか」は男性12%に対し女性33%で女性の方が麻酔に対しての不安が強い。また⑧「創の大きさはどの位か」は男性8%女性23%と女性のほうが身体的変化への不安は強い。⑩「家事・育児・子供のことが心配」は男性0%女性31%、⑪「更衣」に多対しても男性0%女性6%でこの2項目は女性特有の不安である。

(2) 術前に看護婦に要求する援助 (図4・5・6)

手術前に看護婦に要求する援助では①「自分の身体のことをきちんと話して欲しい」(男性10%女性8%) ②「術後の様子を話して欲しい」(男性8%女性0%) ③「学生がついていたので十分」(男性2%女性11%) ④「話を聞いて欲しい」(男性1%女性27%) ⑤「気遣いをもって接して欲しい」⑥「時々声を掛けて欲しい」⑦「周囲に知られたくないので小声で話して欲しい」は男性0%女性6~10%である。⑧「術前検査の説明をきちんとして欲しい」⑨「質問にはもっといいねいに誠意をもって答えて欲しい」は男性0%女性3%である。⑪「看護婦のオリエンテーションは良かった」男性3%女性16%という答えもみられる。

4. 考 察

手術前の不安は手術の大小に関わりなく男女共にみられるのは「術後の疼痛」「手術の無事終了」「麻酔効果」の3点であった。中でも「疼痛」に関しては男性の70%近くが不安だと答え男性の方が痛みに対して敏感であるといえる。オリエンテーションでは疼痛の緩和に対して医師・看護婦とも除痛の方法を具体的に話すことが大切であると思われた。

また男性に特徴があるのは「職場復帰」で女性に対し約4倍も不安が強いことがわかった。これは一日も早く復帰し家族を支えていかななくてはならないと考えるためだろうか。中には「自分が倒れたら社員も社員の家族も困る」という経営者や、入院中にもかかわらず外出許可で職場の会議に出席している男性も見られた。「歩行」についても男性の方が女性の2倍近くが不安を持っている。「歩く」ということは手術後の自立を表しているためだろう。また「食事」に対しても女性0%男性8%という結果がでていいる。これは食事ができる＝回復していると関連するのだろうか。これらに関して医師と協力しだいたい目安を話しておくことも必要かもしれない。

女性では「麻酔覚醒」に対する不安が強い。また「家事・育児」「更衣」など日常生活的な不安がみられたのが特徴である。女性は主婦または母としての立場から自分自信の事以外への不安がみられ、他者への心配も不安の要因になることがうかがえる。また「創の大きさ」に対しても男性より不安が強い。これは手術に伴う身体像・身体機能喪失のため（特に乳房手術）家庭および社会生活への影響を考えての不安であろう。女性には術前からでも創ケアについてのオリエンテーションが必要であると思われる。また家人の協力も得、家の中のことなどは大丈夫だと安心させてあげられれば良いだろう。

こうして男女の特徴を比較してみると、男性の不安は社会性が強いのにに対し女性の不安は日常生活内容が多いといえるだろう。

次に看護婦に要求する援助では「自分の身体のことをきちんと話して欲しい」といっている。しかし、これはガン告知などの問題も含まれるため看護婦は不要な言動は慎まなければならない。医師とカンファレンスを持ち統一したオリエンテーションが必要だと考える。

「術後の様子を話して欲しい」と男性（6%）というが女性では聞くと余計に不安になるので話さないで欲しいという患者もみられた。また女性では「訴えを聞いて欲しい」（27%）という要求が強い。さらに「周囲に知られないよう」（6%）「時々声をかけ」（9%）「気遣いを持って接して欲しい」（10%）と女性の自己主張がそのまま要求されているようである。

男女共にいえることではあるが看護婦は常に「笑顔で誠意をもって接し、患者のプライバシーを守る」という原点を痛感させられる思いであった。男性の要求は女性に比較すると少ないが同様のことを求められているのではないだろうか。

これらの要求のなかで「看護婦のオリエンテーションは良かった」という声が聞かれたのは今後の励みになると思われた。

5. まとめ

手術前の患者の不安は「術後痛くないか」「手術は無事終了するか」「麻酔はよく効くか」という男女共通の大きなポイントのあることがわかった。しかし男女差もあり、男性では社会的不安が強

く女性では日常生活的な不安が強かった。

また看護婦への要求も男性は「自分の身体のことをきちんと話して欲しい」という以外は多くないが、女性はそれらよりも看護婦に「訴えを効いて心配りをもって接して欲しい」と要求している。

看護婦はこれらのことをよく認識し、手術前に適切な言葉掛けや援助を施行し、心身ともによい状態で手術に望めるよう援助していかなければならないと考える。

この研究に協力していただいた皆様に深く感謝いたします。

参考文献

- 1) 丸橋佐和子：手術患者とQOL，臨床看護，5：724-727，1983.
- 2) 丸山 正博：不安を理解する技術，臨床看護，7：804-811，1981.

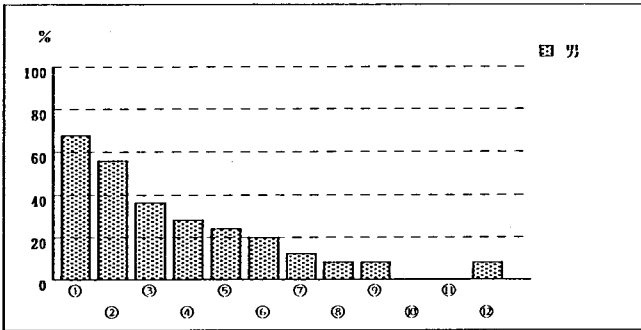


図1. 不安内容 (男)

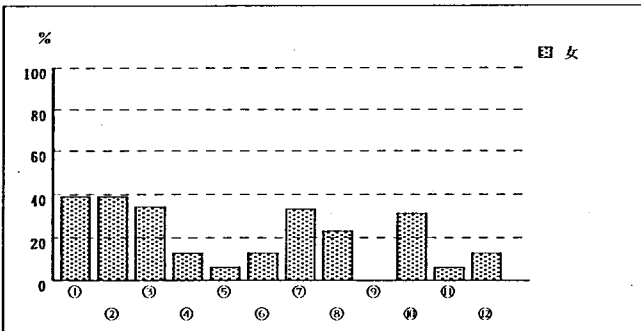


図2. 不安内容 (女)

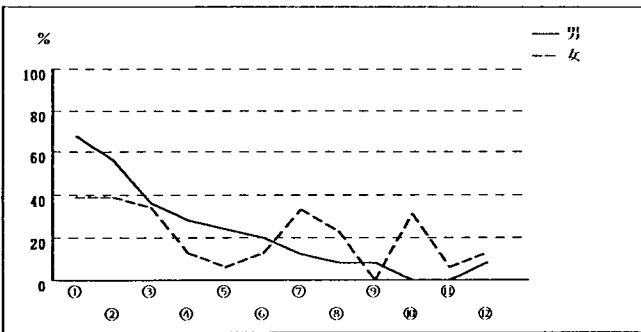


図3. 不安内容比較

【項目】

- ①手術の傷は痛くないか
- ②手術は無事おわるか
- ③麻酔はよく効くか
- ④いり頃から歩けるか
- ⑤職場復帰はいつ頃か
- ⑥どんな手術をするか
- ⑦麻酔からちゃんとさめるか (そのまま死ぬことはないか)
- ⑧創はどのくらい大きいか
- ⑨食事はいつ頃から食べられるか
- ⑩自分の入院中家の事 (誰がするか) 子供の事 (どうしているか, 誰がめんどうみるか) が心配
- ⑪着替えはどうしたら良いか
- ⑫その他
手術後死ぬかもしれない
病気自体の事
他人に知られたくない

等

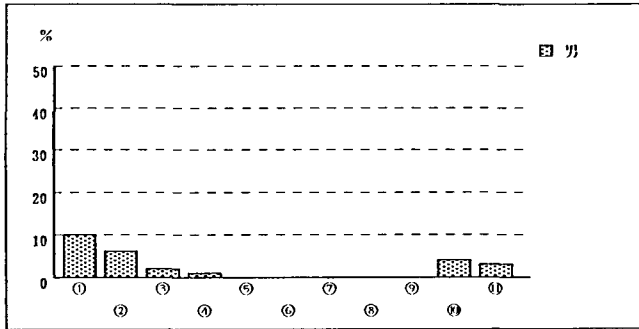


図 4. 看護婦に要求する援助 (男)

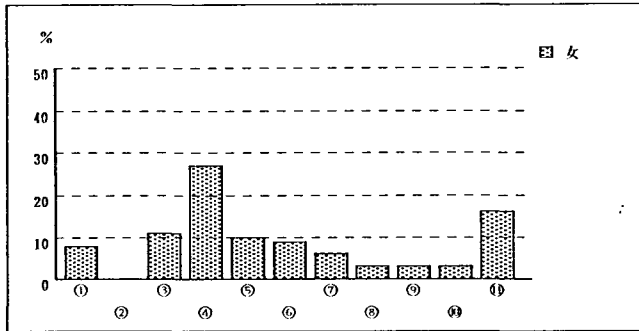


図 5. 看護婦に要求する援助 (女)

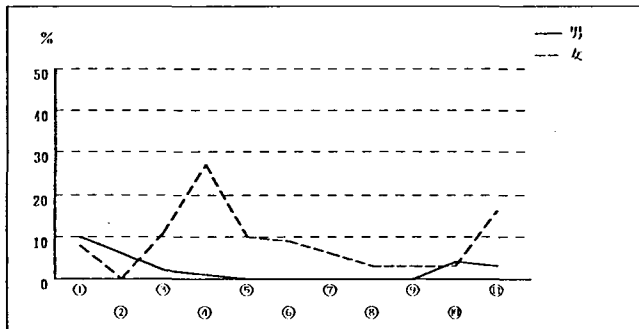


図 6. 看護婦に要求する援助比較

〔項目〕

- ①自分の体の事をきちんと話して欲しい
- ②術後の様子を話して欲しい
- ③学生がついていたので十分だった
- ④話しを聞いて欲しい
- ⑤気づかいをもって接して欲しい
- ⑥時々声かけをして欲しい
- ⑦周囲に知られたくないので話は小声でして欲しい
- ⑧術後検査の説明をきちんとして欲しい
- ⑨質問にはもっといねいに誠意をもって答えて欲しい
- ⑩その他 (入院のきまり入院生活の心得等)
- ⑪看護婦オリエンテーションは良かった